すべてが自分の責任、だから農業はいい　―矢部公輝―

特集

白糠町で農家を目指す

今年の4月1日、農業に従事する地域活性化支援員として矢部公輝さんが、地域おこし協力隊として、野中優衣さんが着任しました。

矢部さんは、2年後または3年後の就農を目指して、町内の農家で研修中です。現在は上庶路の宮木農園でトマトやナガイモなどの試験栽培をしています。

野中さんは、農業経験が浅いため、10月末まで滝川市にある「花・野菜技術センター」で農業の基礎を学んでいます。

農協でナガイモを研究

矢部さん　母親の実家が音更町で農家をやっており、幼い頃から手伝いでナガイモを掘ったり、カボチャを収穫したりしていたんです。それが楽しくて、農作業っていいなという思いがありました。それで、大学は帯広畜産大学に進むことにしました。大学では、畜産学部畜産科学科の食品化学ユニットというところで、ソーセージを作ったり、大豆や金時豆で酢を作るときに出る残渣をパンに混ぜることで、コレステロールが下がるのではないか、というような研究をしたりしていました。捨てるしかないものを有効活用しようという取り組みです。

大学卒業後は、やはり農業に関わる仕事がしたいと思い、音更町農業協同組合（以下、農協）に就職しました。農協では7年ほど仕事をしたのですが、最初の2年間は主にタマネギの販売をしていました。その後、営農指導の担当となり、音更町内の農家を周って、肥料や農薬の選定、畑の状態が良くなければ、その原因が肥料なのか農薬なのか、という原因追及などを行っていました。

十勝には『とかち太郎』という品種の有名なナガイモがあるのですが、このナガイモの実証試験にも携わっていました。十勝は昼夜の寒暖差があるため、きめ細かく真っ白な肉質と粘りのあるナガイモが育ちます。とかち太郎は、普通のナガイモと栽培方法が変わらなく、生産力もあるので、農家に普及しやすいという特徴がありました。農協でもナガイモには力を入れていたので、私もナガイモのことはよく分かっているという感じです。

トマトの収穫 全国トップを経験

ある会社から、新規に植物工場を建てるので、そこの運営をしてほしいという話しがありました。農協での仕事にやりがいを感じてはいたのですが、30歳を前にして、新たなことにチャレンジしてみたいという気持ちが勝り、転職することに決めました。

その会社では、農業施設の入札設計業務や現場管理などのほか、さまざまなプロジェクトの責任者として、札幌市を拠点に全国各地を飛び回っていました。植物工場を運営してほしいと頼まれて、その会社に入ったのですが、やっていることはほとんどが建設業で、自分がやりたいと思っていたことは違いがありました。そういうこともあり、その会社は3年で辞めて、違う会社へ転職しました。

転職先の会社では、トマトの植物工場で栽培責任者を務めました。そこの施設は、最新の環境整備が整っており、日本でセミクローズと呼ばれる最新の施設を除けば、トップの収穫量だったと思います。2ヘクタールの土地で年間1000トンを収穫していました。だいたい一反（300坪）で50トンくらいの収穫量です。一般の目安だと10トン弱くらいの収穫量ですので、かなりの収穫量だったと思います。

1／ナガイモ畑。6月上旬に1000株ほど植えました。順調に育っており、収穫は11月を予定。2／アスパラ畑。先日の雨風で葉が倒れてしまいましたが、育ちは順調です。3／カボチャも育てています。4／トマトは袋栽培で育てています。矢部さんは「袋栽培ならば土壌は関係なく、気候さえあっていれば、どこでも作ることができるので、リスクが少ない」と話していました。

矢部（やべ）　公輝（こうき）さん（34歳）

プロフィール

幕別町出身。帯広畜産大学畜産学部畜産科学科卒業後、音更町農業協同組合に就職。その後、二社の民間企業を経て本年4月1日に地域活性化支援員として着任。白糠町で農家になることを目指し、現在は研修中。趣味はゴルフ、スキー、キャンプ。